

2011 年度 修士論文

総合型地域スポーツクラブの
組織ミッション達成要因に関する研究
ー調和 SHC 倶楽部の行うオープン事業に着目してー

A Study of the Factor of Club Missions Evaluation in
Comprehensive Sports Club:
Focusing on the Programs for Non-Club
Members of Chowa SHC Club

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域
5010A094-8

米山 拓志

Yoneyama, Hiroshi

研究指導教員 木村 和彦 教授

目次

第1章 序論	2
第1節 問題の所在	2
第2節 非営利組織の経営成果に関する先行研究.....	5
第3節 総合型地域スポーツクラブが地域社会へ与える影響に関する先行研究.....	7
第4節 先行研究まとめ	10
第5節 研究の目的	11
第2章 研究方法	12
第1節 用語の定義	12
第2節 研究枠組みの提示.....	13
第3節 調査方法	14
第1項 調査対象クラブの概要	14
第2項 調和 SHC 倶楽部が行うオープン事業の概要	16
第3項 会員・非会員調査の概要.....	20
第4項 調査項目の検討	20
第3章 結果及び考察	23
第1節 回収結果及びサンプル属性	23
第2節 各尺度の信頼性の検討	25
第3節 会員との関係別のクラブの組織ミッション達成度評価（非会員）	25
第4節 オープン事業の認知と参加経験	27
第1項 オープン事業の認知とクラブの組織ミッション達成度評価.....	28
第2項 オープン事業の参加経験とクラブの組織ミッション達成度評価.....	29
第5節 仮説モデルの検証.....	30
第4章 結論	34
第1節 まとめ.....	34
第2節 実践的示唆	35
第3節 研究の限界と今後の課題.....	36
参考文献	37
資料	41

謝辭	48
----------	----

第1章 序論

第1節 問題の所在

スポーツ基本法（文部科学省，2011）では、「スポーツは，人と人との交流及び地域と地域の交流を促進し，地域の一体感や活力を醸成するものであり，人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するものである」とされ，個々人の楽しみを超えて地域づくりにも貢献するものであるとされている。

また，スポーツ振興基本計画（文部科学省，2000）でも，スポーツは「明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全発達に必要不可欠なもの」と位置づけられ，「人々が生涯にわたってスポーツを楽しむことは，極めて大きな意義を有している」ものとして捉えられている。更に，地域での行うスポーツ活動について，「スポーツを通じて住民が交流を深めていくことは，住民相互の新たな連携を促進すると共に住民が一つの目標に向かい共に努力し達成感を味わうことや地域に誇りと愛着を感じるにより，地域の一体感や活力が醸成され，人間関係の希薄化などの問題を抱えている地域社会の再生にもつながるなど，地域における連帯感の醸成に資する」と述べられ，現在では，個々人の楽しみを超え、地域社会にとっても重要なものであることが強調されている。

スポーツ振興基本計画では政策目標として，「国民の誰もが，それぞれの体力や年齢，技術，興味・目的に応じて，いつでも，どこでも，いつまでもスポーツに親しむことが出来る生涯スポーツ社会の実現」と「その目標として，できるだけ早期に，成人の週1回以上のスポーツ実施率が2人に1人（50％）になることを目指す」ことを掲げ，そのための必要不可欠な施策として，総合型地域スポーツクラブ¹（以下，特に必要がない場合は，総合型クラブと略す）の全国展開，すなわち「10年間で，全国の各市町村において少なくともひとつは総合型地域スポーツクラブを育成する」ことを，策定した。

総合型クラブの意義は「それぞれの興味・関心にあわせてスポーツを楽しむことが出来

¹ 総合型地域スポーツクラブとは，黒須（2002）によると，①複数の種目が用意されている②地域の誰もが，年齢や技能レベルに応じていつまでも活動できる③拠点となる施設を持ち，定期的・継続的に活動を行うことができる④質の高い指導者がいて，個々のニーズに応じた指導が行われる⑤スポーツ活動だけでなく，文化活動も準備されている，という特徴を持った地域のスポーツクラブであるとされる。

るだけではなく、地域住民の交流の場として、家族のふれあいや青少年の健全育成、更には活力ある地域社会の形成にも大きな役割を果たす」（日本体育協会，2008，p. 4）こととされ、活動の内容として多種目が行われていることや、文化活動も行われているなど、これまでの地域のスポーツクラブとは事業内容が多様になっていることがその特徴とされている（黒須，2002）。また、これらの総合型クラブに期待されていることは、先に述べたスポーツ振興基本計画のスポーツの意義として述べられていることと対応していることがわかる。ここから、スポーツ基本法やスポーツ振興基本計画で述べられているスポーツの意義を実現させていくための具体的な政策として、総合型クラブは位置づけられていることがわかる。

しかし、小林（2003）はこの総合型クラブ政策に対して、「総合型地域スポーツクラブの提唱する多世代，多種目といったスポーツクラブの創設によって『地域の人々の暮らしが良くなった』等という実証研究はほとんどなく，ましてや総合型地域スポーツクラブの展開が、『地域教育力の向上』や『地域の活性化』などの『自治的コミュニティ²』に発展したという研究成果は管見ながら見当たらない」（小林，2003，p. 86）という指摘を行っている。

更にこれまで、都市社会学から地域でのスポーツ活動は、「生活拡充集団³」（鈴木，1969），「親交的コミュニティ⁴」（園部，1984），「消費的コミュニティ⁵」（神谷，1997）などとされ、「都市の基盤的構造には関係のない」（鈴木，1969，p. 231）ものであるとされてきた。

このような指摘に対し、伊藤・松村（2009）は、スポーツ実践者を生活者として捉え直し、スポーツ組織が、地域生活者が抱える生活諸課題を含み込んだ組織活動を行うことによって、自治的コミュニティ、つまり都市の基盤的役割を果たすものに変容していく可能性を示唆している。

² 自治的コミュニティとは、「都市的生活様式の変化・拡大による専門処理システムへの高度依存」（園部，1984，p.324）が引き起こしている問題に対して、住民が「共通生活問題の共同処理を、適切な範囲と領域で、住民自らの相互扶助ないし共助によって解決していく」（p.327）ことを目標とするコミュニティである。

³ 鈴木（1969）によると、生活拡充集団とは、「起業的余戯的性格をもつあらゆる種類の団体」（p.231），都市の基盤的構造には関係のない集団であるとされる。

⁴ 親交的コミュニティとは、「第一次的な人間接触を高め、親密な第一次集団の形成を目指す」（園部，1984，pp322-323）コミュニティである。

⁵ 消費的コミュニティとは、（スポーツや文化などを）文化的、消費的要求の充足のための手段としての活動と捉え、問題解決を志向する自治的コミュニティとは対極的位置に分類させるものであるとされている。

そこで本研究では、総合型クラブが行う多様な事業活動に着目した。総合型クラブは「多様な趣味的活動や社会活動を通して、住民を取り巻く地域課題や生活課題をも良い方向に導く」（黒須，2002，p.13）ものであるとされ、事実、総合型クラブでは様々な事業が行われており、全国の総合型クラブを調査した中西ら（2011）の報告によると、文化的事業は40.7%，会員外事業⁶は72.5%のクラブで行われている（表1-1）。福岡市の地域スポーツクラブの地域での活動実施率を調査した吉田（1996）と比較してもわかるように、非会員への活動は、総合型クラブにおいて以前よりも数多く行われていることがわかる（表1-2）。

現在ではJリーグやプロ野球などのプロスポーツクラブでも、試合興行のみならず、地域住民を対象とした多様な事業を行っており、経営体としてのその事業の影響については様々な報告がなされている。例えば、スポーツクラブが行う地域貢献活動は、チーム・アイデンティフィケーションへ影響を与えること（大西・原田，2008）や、チーム愛着へ影響を与える（岸，2011）といった報告がなされている。

総合型クラブの意義・目的の中で繰り返し地域社会といった用語が登場する（黒須，2002：日本体育協会，2008）ことから、先に述べた、総合型クラブが行なっている多様な事業活動の中でも、特に非会員を参加対象とした事業（以下、オープン事業とする）は、会員以外の地域住民と接点となるという意味で非常に重要な事業だと考えられる。

しかし、総合型クラブに関する先行研究においてこのようなオープン事業を評価する研究はいまだなされていない。

⁶ 中西ら（2011）は、会員外事業について「クラブメンバー以外の地域住民を対象としたスポーツ事業・プログラム等の実施有無を単一回答方式（二項選択回答形式）によって測定」（p.79）している。

表 1-1 総合型クラブが行っている事業内容（中西ら，2011，p. 84 をもとに作成）

実施事業の内容		N	%
開設種目数 N=460	1-5種目	116	25.2
	6-10種目	163	35.4
	11-15種目	89	19.3
	16-20種目	54	11.7
	21種目以上	38	8.3
文化的事業 N=585	行っている	238	40.7
	行っていない	347	59.3
会員外事業 N=586	実施している	425	72.5
	実施していない	161	27.5

表 1-2 福岡市のスポーツクラブの地域における活動（吉田，1996，p. 69 を元に作成）

している	していない	不明
79	104	9
41%	54%	5%

N=192

第2節 非営利組織の経営成果に関する先行研究

それでは，このようなオープン事業はどのように評価することが適切なのだろうか．

総合型クラブに代表される地域のスポーツクラブは，島田（2009）による営利性・政府性からの分類（表 1-3）や，非営利組織の定義（表 1-4），更には加藤（2007）による非営利組織の先行研究に共通する非営利組織の定義（表 1-5）から，ほとんどの場合，非営利組織に分類することができると考えられる．また，総合型クラブ創設ガイド（日本体育協会，2008）でも「生涯を通してスポーツに親しめる環境づくりを目指して活動している非営利組織」（p. 4）であるとされている．

表 1-3 営利性，政府性による分類（島田，2009，p. 29）

営利性/政府性	政府 Governmental	非政府 Non-Governmental
営利 Profit	公企業	企業
非営利 Non-Profit	行政	非営利組織

表 1-4 非営利組織の定義（島田，2009，p. 32 を元に作成）

1. 公益に適う独自のミッションを掲げ得るもの
2. 民間の働き
3. 利益分配をしないもの

表 1-5 非営利組織の先行研究に共通した視点（加藤，2007，p. 51 を元に作成）

「社会」に何らかの変化を求めている
「自発性」に基づいた活動である
「活動」によって様々な関係者を巻き込んでいく

このような非営利組織の成果測定については，非営利組織研究の分野から数多く行われており，非営利組織の経営成果は組織ミッションの達成度から評価がなされる（島田，2009：宮城・佐藤，1999：兵藤，2007）とされている。「非営利組織の最終決算書は財務諸表ではない．ミッションの達成である」（島田，2009，p. 74）と述べられ，「そもそも営利を目的としない非営利組織体に対して，このような損益（利益）に基づく業績評価を基礎としたマネジメントを適用することは不可能である．（中略）このようなマネジメントとは，すなわち，非営利的要素に基づいて組織運営の成果を測定することによって遂行される」（宮城・佐藤，1999，p. 12）と指摘されている．更に兵藤（2007）も，「非営利組織が存続し，活動を継続していくためには，非営利組織体がどれだけ活動目的を達成したのか，すなわち，ミッションの達成について評価することが必要であると考えられるようになってきた」（p. 87）と指摘を行なっている．

スポーツ経営学分野で非営利のスポーツ組織を，組織ミッションからの評価を用いて研

究を行ったものは散見される。

例えば赤岡（2009）は、中央競技団体を非営利組織として捉えて組織論的アプローチから研究を行い、どのような「環境状況」「戦略」「組織特性」が「組織成果」へ影響を与えているかを検証しているが、この際「組織成果」を測る際用いられたものは、中央競技団体の全体目標の達成度であった（図 1-1）。

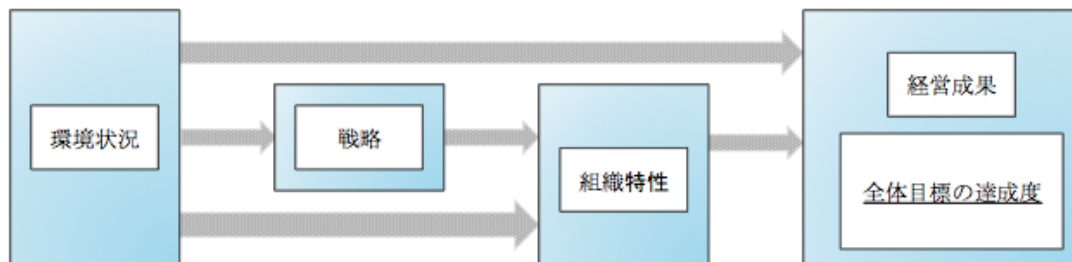


図 1-1 赤岡（2009）の研究枠組み（赤岡，2009，p. 50 を元に作成）

また柴田ら（2004）は、秋田県琴丘町の総合型クラブを事例に、経営条件の評価と経営成績の評価を行なっている。柴田らは、「スポーツ実施率の向上や住民の交流など」の「地域スポーツクラブが町民に与えた効果」を経営指標として評価を行ない、地域スポーツクラブ活動が地域にもたらした一番の効果として、住民同士の交流の機会が増えたことを挙げている。

第 3 節 総合型地域スポーツクラブが地域社会へ与える影響に関する先行研究

柴田ら（2004）が指摘するように、総合型クラブの経営成果は、地域社会へ与えた影響だと考えると、総合型クラブが地域社会に与える影響に関する研究を整理する必要がある。

堤ら（2002）は、総合型クラブを対象に調査を行い、いくつか調査した地域社会への影響の中で、住民行政共に効果があるものとして、「地域コミュニティ形成」「誇り・愛着の形成」の二つを挙げている。

黒後・藤田（2007）は、栃木県の「友遊いずみ」の会員へ調査を行い、クラブ設立の個人的効果と地域社会への効果について調査を行っている。個人的効果である「クラブで活動するようになって変わったことは？」という問いに対し、「健康になった」「生活にはり

が出た」「地域の子供との交流が増えた」「生きがいができた」という影響を報告している。また、地域社会への効果の「できて地域でよくなったことは？」という項目については、「学校が地域住民に開かれた」「地域住民がスポーツ活動をする回数が増えた」「地域住民の交流などコミュニティが活性化した」「地域の子供たちを見守る機会が醸成された」「地域が明るくなった」ことを報告している。

山本ら（2010）は吉井スポレククラブを対象に調査を行い、クラブ会員に対してクラブ加入後の変化を調査している。その結果、「新しい仲間ができた」「スポーツの楽しさを知った」「ストレス解消になった」「生活にメリハリができた」という項目について、クラブ加入後に変化が見られたと述べている。

また、高屋・同（2008）は、熊本県の総合型クラブを対象に、市民スポーツフェスタ参加者との比較分析を行い、「所属団体を問わずスポーツ活動が地域生活にポジティブな影響を与えている」と結論づけている。

以上のように、総合型クラブの地域社会への影響に関する研究は数多く行われているが、第1章でも述べたように、「総合型地域スポーツクラブの提唱する多世代、多種目といったスポーツクラブの創設によって『地域の人々の暮らしが良くなった』等という実証研究はほとんどなく、ましてや総合型地域スポーツクラブの展開が、『地域教育力の向上』や『地域の活性化』などの『自治的コミュニティ』に発展したという研究成果は管見ながら見当たらない」（小林，2003，p. 86）という指摘も存在する。

また、小林の指摘にもあるように総合型クラブは、会員のみでなく「地域の人々」や「地域社会」に影響があるとしているが、先行研究で地域社会への効果について評価を行なっている視点は、会員の視点からのみであった。

以上をまとめたものが、表 1-6 である。

表 1-6 総合型クラブが与える影響のまとめ

筆者	年	調査対象	調査内容	影響の調査項目
堤ら	2002	会員	地域活性化効果に関する意識	地域コミュニティ形成 誇り・愛着の形成 情報発信 公共整備 地域イメージ向上
黒後・藤田	2007	会員	クラブ設立の効果	健康になった 生活にはりが出た 地域の子供との交流が増えた その他
山本ら	2010	会員	クラブ加入後の変化	新しい仲間ができた スポーツの楽しさを知った ストレスの解消になった 変化はない
柴田ら	2004	会員/ 行政職員	地域スポーツクラブ活動が、 地域にもたらした効果	健康の維持・増進 体力の向上 ストレスの解消・気晴し 運動不足の解消 運動・スポーツを楽しむ 地域社会への貢献 競技力向上 友人・仲間との交流機会 家族と触れ合う機会ボランティア
高屋・同	2008	会員	生活・意識の変化	競技レベルが上がった 余暇時間の有効活用ができるようになった 健康状態が保てるようになった

				家族での話題が増えた 家庭内での交流の輪が広がった 他世代の方と接する機会が増えた 地域に対する愛着が増した
--	--	--	--	---

第4節 先行研究まとめ

柴田ら（2004）のように、総合型クラブの経営成果を、総合型クラブが地域へ与えた影響全てから評価を行うことは難しいと考えられる。何故なら、クラブの大小にかかわらず、地域社会へ与えた影響全てを把握することは難しく、また、それら全てを測定することは困難であると考えられるからである。実際、表 1-6 でまとめた総合型クラブが地域へ与えた影響の調査項目に関しても、非常に多岐にわたっており、また、研究によって調べていることが異なるため統一感を欠くことは否めない。

そこで本研究では、清水（2002）の「誰に、どのようなサービスを、どのような目的で提供されるのかは、まさに経営組織自らの意思によって意思決定されるべきもの」(p. 128)との指摘を踏まえ、総合型クラブが組織ミッションに掲げていることを基準として、その達成度を評価することが適切であると考えた（図 1-2）。

つまり、総合型クラブの組織ミッションは、総合型クラブの地域社会へ与える影響の一部を構成するものと考えた。また、このように地域社会への影響を非営利組織の経営成果として明示的に意識し評価を行った先行研究はなかった。

以上、総合型クラブが地域社会へ与える影響に関する先行研究を整理した結果、先行研究の問題点として下記三点が挙げられる。

- ① 地域社会への影響は、常に会員の視点から評価されてきた
- ② 総合型クラブが非営利組織であることを明示的に意識し、個々の総合型クラブの組織ミッションの達成度を経営成果として、地域社会への影響を調査したものはない
- ③ 総合型クラブのどのような事業が地域社会への影響を規定しているかを検証した研究は見当たらない

更に、①について、「ミッションの達成度評価については主観的になったり、判断が甘くなったりする懸念があったりするが、(中略)それに主観を加える場合も、様々な立場にある人達の評価を集めることなどが必要である」(島田, 2009, p. 116) という指摘もある。

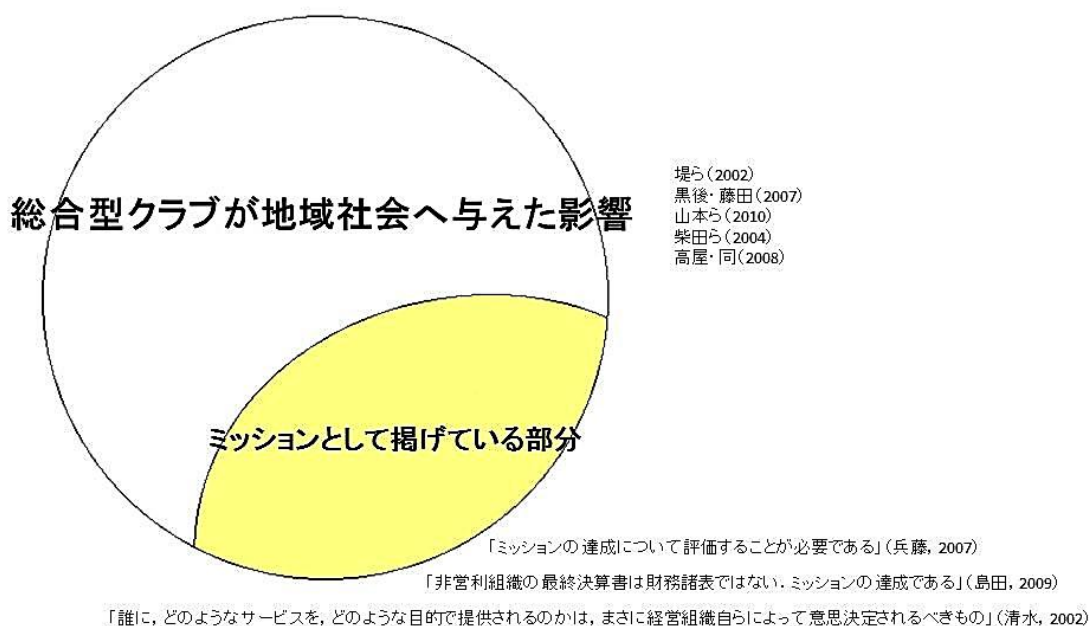


図 1-2 総合型クラブの地域への影響と組織ミッション

第5節 研究の目的

以上の先行研究を踏まえ、本研究では第1節で述べたオープン事業に着目した。

オープン事業は数多くの総合型クラブで行われていることや、その事業内容から、地域社会との接点となること、更に「戦略のもとに、サービスやプログラムが設計され、それを通して戦略を達成し、ミッションの実現を目指す。逆に言えば、ミッションがサービスやプログラムを通して実現される」(島田, 2009, p. 146) という指摘を踏まえ、組織ミッションの達成をオープン事業が規定しているかを検証することが必要であると考えた。

以上をもとに、本研究の目的を以下のように設定した。

【研究の目的】

- オープン事業がクラブの組織ミッションの達成度にどのような影響を与えているかを明らかにする

第2章 研究方法

第1節 用語の定義

本研究では、以下の用語について定義を行う。

① オープン事業

総合型クラブが行う事業のうち、会員にならないと参加することができないものでなく、会員以外の非会員（地域住民）も参加することが出来る事業を、オープン事業と定義する。

オープン事業は、中西ら（2011）の調査によると、総合型クラブの約 3/4 のクラブが行っており、多くのクラブで事業として展開されていることがわかる。また、総合型クラブでない、福岡の地域スポーツクラブを事例とした吉田（1996）の調査でも、約 41%の地域スポーツクラブが地域における活動を行なっていることが報告されており、活動内容は、スポーツにあまり関連のない、清掃活動などの事業も行われていることが明らかになっている（表 2-1）。

このように、総合型クラブだけでなく、様々な形態で活動している地域のスポーツ組織が、非会員も含めた地域住民に対して活動を行なっていることが理解できる。

表 2-1 福岡市のスポーツクラブの地域における活動の内容（吉田，1996，p.70）

	N	%
スポーツ教室の実施・手伝い	12	15.2
大会や体育祭の実施手伝い	42	53.2
映画会・講習会・バザー	4	5.1
清掃活動や環境美化などの福祉活動	12	15.2
老人や障害者の世話などの福祉活動	1	1.3
その他	7	8.9
合計	78	100

② クラブの組織ミッション

総合型クラブの経営成果を測る指標として、組織ミッションの達成度を用いる。非営利組織では、最終的に目指すべきものは組織ミッションの達成であり（島田，2009），その達成度を組織成果の指標とすることができる（赤岡，2009）。

本研究では、組織ミッションとして、調査対象となったクラブの理念・使命や目的をもとに項目を作成し、クラブ関係者によって妥当性を確認してもらった後、会員と非会員調査を行った（第2章第4項参照）。

第2節 研究枠組みの提示

本研究では、以下を目的とした（再掲）。

- オープン事業がクラブの組織ミッションの達成度にどのような影響を与えているかを明らかにする

本研究の枠組みでは、オープン事業に関して事業の認知・参加経験・評価という三つの視点から研究を行う。

総合型クラブの行うオープン事業は、会員・非会員に対するサービスだと考えられる。サービス品質の先行研究から、「サービス品質の評価が、事前、最中、事後の全てのプロセスで起こる」（中村，2007）ことや「顧客の主観的な判断によってサービス品質は評価される」（中村，2008，p. 43）ことが指摘されている。

また、非営利組織研究の分野から、「戦略のもとに、サービスやプログラムが設計され、それを通して戦略を達成し、ミッションの実現を目指す。逆に言えば、ミッションがサービスやプログラムを通して実現される」（島田，2009，p. 146）という指摘もなされている。

以上を踏まえ、本研究の研究目的を明らかにするために、会員、非会員それぞれ以下の仮説モデルを作成した（図 2-1，2-2）。

オープン事業に参加しているということは、オープン事業を認知している。また、サービス品質の先行研究を参考に、認知・参加経験からオープン事業の評価へ影響を与えていると考えた。

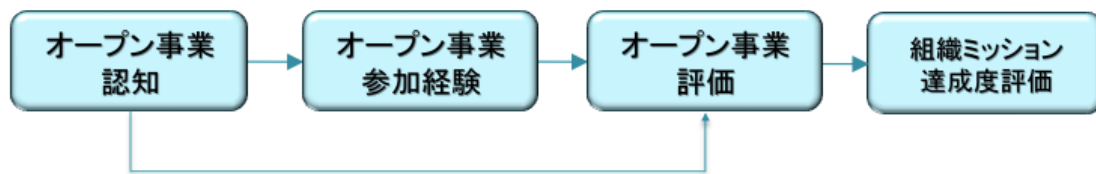


図 2-1 仮説モデル

第3節 調査方法

第1項 調査対象クラブの概要

本研究では、東京都調布市で活動を行う調和 SHC 倶楽部を調査対象とする。

調和 SHC 倶楽部は、クラブの会報誌 Trim（調和 SHC 倶楽部，2011）によると、「だれもが、いつでも、どこでも気軽にスポーツを楽しんだり健康な体力づくりをしたり，文化的な趣味を増やしたりしながら地域の一人ひとりの力によって創り上げる総合型地域スポーツクラブ」として平成 14（2002）年 9 月に設立され，平成 15（2003）年 11 月に特定非営利活動法人（NPO）認定を受けたクラブである。会員は，調和小学校及び旧大町小学校の施設を利用して活動を行なっている。

クラブ会員は，平成 23（2011）年 3 月 22 日時点で，大人会員：（男）216 名／（女）486 名，子供会員：（男）147 名／（女）266 名，合計：1115 名である。

調和 SHC 倶楽部の SHC とは，「Sports, Health, Culture」の頭文字であり，これらのカテゴリーを中心にして，活動を行なっている。平成 23（2011）年の定期活動は表 2-2 の通りである。

表 2-2 調和 SHC 倶楽部活動種目一覧（平成 23 年度）

調和SHC倶楽部の活動種目	
■ スポーツ 剣道 バドミントン 卓球 インディアカ ユニホッケー フロアボール バスケットボール 硬式テニス バレーボール ソフトバレーボール ソフトボール	■ 文化 歌声広場 書道 囲碁 絵手紙・四季絵 よさこい 将棋 絵画 英語 電子工作 ゴスペル キッズフラワーアレンジ ■ ジュニアサポート 小学生バドミントン チアダンス 中学生バドミントン キッズホップ 小学生ユニホッケー 小学生スイミング 小学生硬式テニス ■ シニアの会 シニア体力アップ シニアソフトボール
■ 健康 水泳 ラティーノ（ラテンエアロビクス） インドアペタンク グラウンドゴルフ 親子体操 気功 健康体操 フレッシュヨーガ フラダンス	

また、クラブの定款に記載されたクラブの活動目的は以下の通りである（表 2-3）。

表 2-3 調和 SHC 倶楽部の定款

調和SHC倶楽部
この法人は、地域住民が年齢性別を問わず、自発的にスポーツや文化活動を楽しみ、各自の健康、体力の維持・向上をはかると共に、豊かな人間形成に務め、活動を通じて地域の連帯を培い、明るい市民生活の実現に資することを目的とする。

クラブの事務局長によると、クラブが当初範域として想定をしたのは、調和小学校区で

ある調布市西つつじヶ丘3丁目1～12、4丁目14～28、37、38、40～52であった。現在では、クラブ会員は、調布市一帯から参加している。

第2項 調和 SHC 倶楽部が行うオープン事業の概要

本研究でオープン事業として扱うものは、調和 SHC 倶楽部が平成23（2011）年度までに行った以下の活動を対象にする（表2-4）。また、各オープン事業の概要は以下の通りである（一部、平成22年度以前に実施された事業を含む）。

表 2-4 調和 SHC 調和倶楽部が行うオープン事業一覧

オープン事業一覧	
調和地域運動会	東日本大震災チャリティバザー
新春スポーツ交流会	SHC倶楽部寄席
ニュースポーツフェスタ	散策会
インドアペタंक大会	睡眠についての講演会
調和文化祭	調布市福祉まつりへの参加
ゴスペルクリスマスコンサート	

① 調和地域運動会

調和 SHC 倶楽部の所在地である調和地区で行われている調和地域運動会は、調和 SHC 倶楽部が中心となって開催している。平成22（2010）年度の実績としては、10月24日に開催され、参加人数は約1200名という地域の運動会としては非常に大規模なものであった。



② 東日本大震災チャリティバザー

平成23（2011）年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援チャリティイベントとして、平成23（2011）年9月25日に開催された。バザーだけでなく模擬店、ジャズ



演奏、よさこいなどの活動を行い、1000 名を超える来場者があった。売上金は 582,409 円となり、義援金として 11 月 2 日に日本赤十字社を通じて被災地支援のために寄付された。

③ 新春スポーツ交流大会

元々は調和 SHC 倶楽部のプレオープンの際の事業として始まったものであるが、活動が継続的に実施され、平成 23 (2011) 年度で 10 回目の開催になる。毎年 1 月の日・月曜日に開催され、平成 23 (2011) 年度は、平成 24 (2012) 年 1 月 8・9 日に、インディアカ、卓球、バレーボールの種目が開催された。毎年約 400 人の参加者があり、調和 SHC 調和倶楽部会員だけでなく、市内の多くのチームが参加する。会場は例年、調和小学校アリーナと旧大町体育館を利用して開催される。

④ SHC 倶楽部寄席

平成 23 (2011) 年で第三回目となる SHC 倶楽部寄席は、文化部会の事業として、12 月に開催された。前年の平成 22 (2010) 年は 11 月に開催されている。毎年、落語・漫談を中心に、更には地元の電気通信大学の学生によるジャグリングなどが行われている。また、クラブの資料によると、この活動がきっかけとなり、つつじヶ丘商店会の中で、SHC 倶楽部会員の割引制度ができ、相互協力のかたちが築かれることとなった。



⑤ ニュースポーツフェスタ

毎年、キンボールや手のひらバレーボールなどの数あるニュースポーツの中から人種目が選択され、開催されている。しかし、人がなかなか集まらないため、平成 24 (2012) 年度は開催しない予定である。

⑥ 散策会

シニア友の会の事業として平成 17(2005)年から行われており、平成 23 (2011) 年 11 月 23 日に開催される回で、36 回目を数える。大体 2 ヶ月に 1 度の頻度で開催されており、毎回平均で 20～30 名程度の参加人数がある。内容は、散策コースとウォーキングコースの 2 コースが毎回選択できるようになっており、目的に応じて個人楽しめるようになっている。第 36 回は多摩丘陵の生田緑地・枳形山展望台へ 5 キロの散策を行った。



⑦ インドアペタンク大会

健康部会の事業として、平成 23 (2011) 年に初めて開催された。障害者と共に楽しめる種目として、調和 SHC 調和倶楽部の活動で行われているインドアペタンクが選ばれた。



⑧ 睡眠についての講演会

健康部会の事業として平成 22 (2010) 年に行われた。調布市を拠点として全国的に活動している精神科医を招いて、睡眠についての講演会を行った。現代病であり、うつ病にもつながる恐れのある睡眠不足を如何に防ぐかという内容であった。



⑨ 調和文化祭

毎年 3 月に開催されており、平成 23 (2011) 年度は平成 24 (2012) 年 3 月 24 日から開催される予定となっている。調和 SHC 倶楽部で行われているダンスサークルを中心とした舞台発表、模擬店の出店、クラブの文化部会の会員や地域の人々から集まった作品の展示会などを行なっ



ている。地域交流の場として機能しており、開催される際には地域住民に対して広く折り込みチラシをまいている。

⑩ 調布市福祉まつりへの参加

毎年開催される調和市福祉まつりへの参加を行なっている。主には、ゴスペル、よさこい、ジュニアチアのサークルが、調布市福祉まつりを活動の場の1つとして活用している。



⑪ ゴスペルクリスマスコンサート

調和 SHC 調和倶楽部に所属するゴスペルファミリー調和 SHC のクリスマスコンサートとして毎年行われている。平成 23（2011）年は 12 月 18 日に大町スポーツ施設で開催された。



第3項 会員・非会員調査の概要

会員調査に関しては、調査期間中に、クラブへ直接出向き留置法にて配布、回収を行った。調査対象年齢は、調査の信頼性をある程度担保するために、15歳以上とした。

非会員調査に関しては、日本郵政株式会社のタウンメールというサービスを用いて行った。タウンメールとは、指定した郵便番号一帯のすべての世帯に対して、配布を行うサービスである。本調査では、クラブ関係者との打ち合わせの後、比較的クラブ会員が多い菊野台3丁目を対象にして、郵送法で調査を行った。また、非会員向け調査に関しては、「クラブ会員以外の人が答えること」と「15歳以上の人を対象」の旨を明記して調査を行った。

会員調査及び非会員調査の概要については以下の表2-5の通りである。

表 2-5 会員・非会員調査の概要

調査概要		
	会員調査	非会員調査
調査期間	平成23年11月13日～11月30日	平成23年11月9日～11月30日
調査方法	質問紙調査	
配布方法	留置法	郵送法（タウンメール）
調査対象	15歳以上のクラブ会員	15歳以上のクラブ非会員
備考	—	菊野台3丁目に配布
調査項目	○会員歴	○クラブ会員との関係
	○オープン事業の認知	○オープン事業の認知
	○オープン事業の参加経験	○オープン事業の参加経験
	○オープン事業の活動評価	○オープン事業の活動評価
	○クラブの組織ミッション達成度評価	○クラブの組織ミッション達成度評価
	○クラブ愛着	○クラブ活動への参加意図
	○基本的属性	○基本的属性

第4項 調査項目の検討

本研究では、会員と非会員に調査を行うために、以下の項目を設定した。（表2-6）

表 2-6 会員・非会員調査の項目

会員調査	非会員調査
○会員歴	○クラブ会員との関係
○オープン事業の認知	○オープン事業の認知
○オープン事業の参加経験	○オープン事業の参加経験
○オープン事業の活動評価	○オープン事業の活動評価
○クラブの組織ミッション達成度評価	○クラブの組織ミッション達成度評価
○クラブ愛着	○クラブ活動への参加意図
○基本的属性	○基本的属性

① オープン事業認知/参加経験

オープン事業は、クラブ関係資料の確認及びクラブ関係者へのヒアリングを行い、平成 23（2011）年度までに調和 SHC 倶楽部が行ったオープン事業を項目として作成した。回答者は、認知及び参加経験がある事業全てに対して、○をしてもらう形を取った。その後の処理としては、0・1 のダミー変数を用いて統計的に処理を行った。

② オープン事業評価

オープン事業の評価に関しては、「調和 SHC 倶楽部の地域貢献活動は地域へ貢献している」という質問に対して、「7：とても貢献している」から「1：全く貢献していない」までの等間隔尺度を仮定して、7 段階で測定を行った。

③ クラブの組織ミッション達成度評価

クラブの組織ミッション達成度評価に関しては、調和 SHC 倶楽部の定款に示されている活動目的（既出）を基に 6 項目を作成、その後、クラブ関係者への確認を行い、項目を確定させた。質問項目は表 2-7 の通りである。各項目は、「7：とてもあてはまる」から「1：全く当てはまらない」までの等間隔尺度を仮定して、7 段階で測定を行った。

表 2-7 クラブの組織ミッション達成度評価の項目

調和 SHC 倶楽部は、明るい市民生活の実現に貢献している
調和 SHC 倶楽部は、地域住民のスポーツ振興に貢献している
調和 SHC 倶楽部は、地域住民の文化活動の振興に貢献している
調和 SHC 倶楽部は、地域住民の健康・体力の維持・向上に貢献している
調和 SHC 倶楽部は、豊かな人間形成に寄与している
調和 SHC 倶楽部は、地域の連帯を培うことに貢献している

④ クラブ愛着

会員向けの調査項目として使用したクラブ愛着の項目は、永田ら（2007）が訳した Wakefield&Sloan（1995）のチームロイヤルティを問う 3 項目を修正して測定を行った（表 2-8）. 各項目は、「7：とてもあてはまる」から「1：全く当てはまらない」までの等間隔尺度を仮定して、7 段階で測定を行った.

表 2-8 クラブ愛着の項目

私は、調和 SHC 倶楽部のファンである
私は、調和 SHC 倶楽部の会員であることを他人に知らせたい
私は、調和 SHC 倶楽部の状況にかかわらずクラブを応援する

⑤ クラブ活動への参加意図

非会員向けの調査項目として使用したクラブ活動への参加意図の項目は、「あなたは今後、調和 SHC 倶楽部の活動に参加したいですか」という項目に対し、「4：とても参加したい」から「1：全く参加したくない」までの等間隔尺度を仮定して、4 段階で測定を行った.

⑥ 基本的属性

会員・非会員の基本属性を把握するために、「性別」「年齢」「配偶者の有無」「子供の有無」「職業」「調布市の居住年数」「郵便番号（会員のみ）」を設定した. 会員は 7 項目、非会員は 6 項目となっている.

第3章 結果及び考察

第1節 回収結果及びサンプル属性

本研究における、会員及び非会員調査の回収結果については、表 3-1 の通りである。

表 3-1 回収結果

	配布	回収	有効回答	回収率
会員調査	153	153	142	100.0%
非会員調査	1910	241	212	12.6%

非会員調査に関しては、回収率が 12.6%と非常に低い結果となった。郵送法は「回答する義務感が生じにくいので、直接法に比べると回収率は低い」（田中，1998，p. 38）という調査法上の限界に加え、今回の非会員用の質問紙が、調和 SHC 倶楽部の存在を認知している人しか答えることが出来なかったことと、非会員しか答えることが出来ないため会員で構成されている世帯は答えることができないことが原因として考えられる。

次に本研究のサンプル属性を、会員・非会員別に表 3-2 に示した。

会員と非会員のサンプルを、SPSS18.0 によるカイ二乗検定にて比較した結果、会員と非会員とでは年齢と子供の有無、職業について有意な差が見られた。年齢については、会員の方が 50～59 歳、70～79 歳の層において割合が高くなっている。また、子供の有無に関しても会員の方がいると答えた割合が高くなっている。

また、会員のみを対象として調査した会員歴に関しては、約半数の会員が 5 年以上となっている（表 3-3）。調和 SHC 倶楽部は平成 14（2002）年に設立されており、調査を行った平成 23（2011）年 11 月時点において設立後約 9 年が経過しているが、約半数のクラブ会員が設立後数年以内に入会したクラブ会員であることがわかる。

クラブの非会員には、クラブ会員との関係について、「子供が会員」「子供以外の家族が会員」「友人・知人が会員」「周りにクラブ会員はいない」の選択肢の中で調査を行った（表 3-4）。その結果、約 65%の人が「周りにクラブ会員はいない」と答えており、本調査における非会員のサンプルにとって、クラブとの関わりはあまり無いことが伺える。

表 3-2 会員及び非会員のサンプル属性

		会員		地域住民		カイ2乗検定
		N	%	N	%	
性別	男性	56	39.4	72	34	$\chi^2=1.255$, d. f. =1, n. s.
	女性	84	59.2	139	65.6	
	合計	140	98.6	211	99.5	
年齢	15～19歳	7	4.9	2	0.9	$\chi^2=31.11$, d. f. =7 ***
	20～29歳	10	7	23	10.8	
	30～39歳	13	9.2	53	25	
	40～49歳	32	22.5	55	25.9	
	50～59歳	30	21.1	25	11.8	
	60～69歳	25	17.6	35	16.5	
	70～79歳	19	13.4	10	4.7	
	80歳以上	2	1.4	3	1.4	
	合計	138	97.2	206	97.2	
配偶者	独身	32	22.5	55	25.9	$\chi^2=.216$, d. f. =1 n. s.
	既婚	99	69.7	151	71.2	
	合計	131	92.3	206	97.2	
子供の有無	いる	95	66.9	116	54.7	$\chi^2=10.247$, d. f. =1 **
	いない	31	21.8	84	39.6	
	合計	126	88.7	200	94.3	
職業	正社員	33	23.2	75	35.4	$\chi^2=26.631$, d. f. =6 ***
	契約社員	5	3.5	7	3.3	
	パート・アルバイト	43	30.3	24	11.3	
	主夫・主婦	25	17.6	56	26.4	
	学生	6	4.2	7	3.3	
	無職	17	12	20	9.4	
	その他	7	4.9	21	9.9	
	合計	136	95.8	210	99.1	

***P<.001 **P<.01

表 3-3 会員歴

	会員	N	%
会員歴	1年未満	14	10.4%
	1～2年未満	11	8.2%
	2年～3年未満	16	11.9%
	3年～4年未満	12	9.0%
	4年～5年未満	11	8.2%
	5年以上	70	52.2%
	合計	134	100.0%

表 3-4 会員との関係

	非会員	N	%
会員との関係	子供がクラブ会員	17	8.0
	子供以外の家族がクラブ会員	11	5.2
	友人・知人がクラブ会員	45	21.2
	周りにクラブ会員はいない	138	65.1
	合計	211	99.5
	欠損値	1	0.5

第2節 各尺度の信頼性の検討

各尺度の信頼性を検討するため、各項目の信頼性分析を行い、Cronbach α 係数を算出した。その結果、Cronbach α 係数は会員の組織ミッションの達成度評価：.953、非会員の組織ミッションの達成度評価：.969、クラブ会員の愛着：.900 となった。Cronbach α 係数は、「どの程度あれば一概に信頼性があるとは言えないが、0.8 程度」が目安（鎌原，1998）と指摘されており、十分な信頼性があると考えられる。

第3節 会員との関係別のクラブの組織ミッション達成度評価（非会員）

本研究では、非会員に対して、クラブ会員とどのような関わりを持っているかを聞いている。非会員にとって、調和 SHC 倶楽部との接点は、オープン事業以外には家族や知人を

通してであると考えられたため、クラブ会員との関係と組織ミッション達成度評価の間に
 関連があるかどうかを調べるため、クラブ会員との関係別に非会員を分類し、クラブの組
 織ミッション達成度の平均値の比較を行った（表 3-5）。

表 3-5 クラブ会員との関係別組織ミッション達成度評価（非会員）

	N	スポーツ振興	文化振興	健康の維持	人間形成	連帯	市民生活
子供が会員	17	6.24	5.47	5.71	5.29	5.76	5.47
家族が会員	11	5.18	5.09	5.27	5.00	5.09	4.73
友人が会員	45	4.76	4.56	4.44	4.29	4.31	4.33
会員は知らない	138	4.36	4.26	4.27	4.11	4.25	4.31

これらの項目を合計し、組織ミッション達成度評価の平均値を SPSS18.0 による一元配置
 分散分析にて、各群間の平均値の差の検定を行った（図 3-1）。

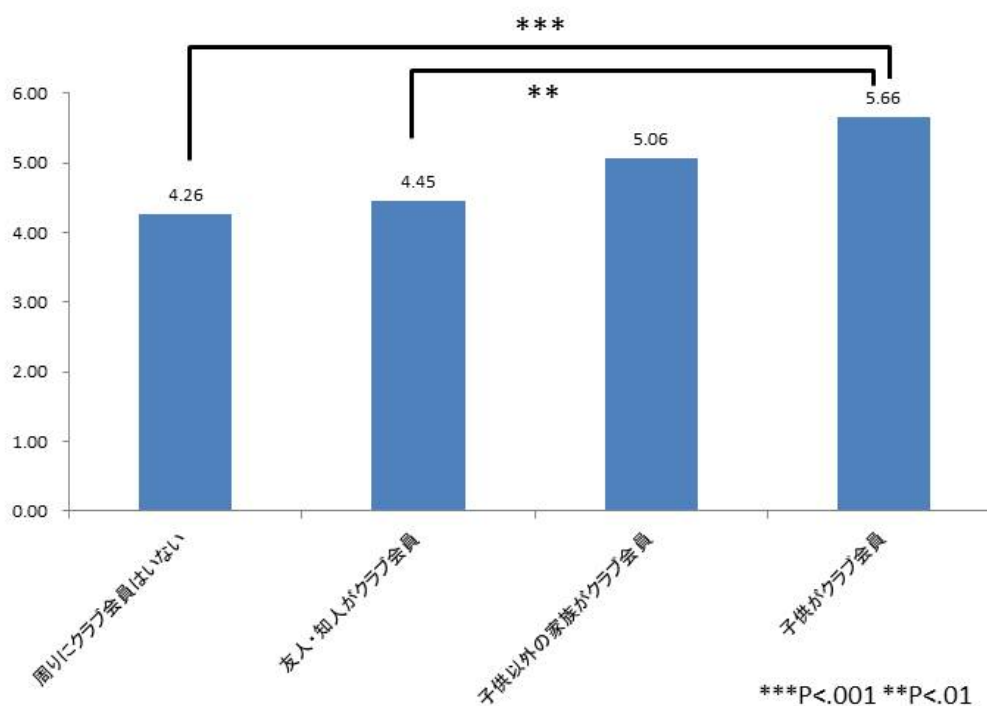


図 3-1 会員との関係別クラブの組織ミッション達成度評価の比較

その結果、「子供がクラブ会員」群と「周りにクラブ会員はいない」群の間で 0.1%水準、
 「子供がクラブ会員」群と「友人・知人がクラブ会員」群との間で、1%水準で有意な差が

あることが明らかになった。

この結果から、「子供がクラブ会員」の人は、「知人・友人がクラブ会員」の人と「周りにクラブ会員はいない」人よりも、クラブの組織ミッション達成度を高く評価していることがわかる。このことは、非会員は調和 SHC 倶楽部との接点がオープン事業以外に家族や友人を通してしかないため、子供を通して「調和 SHC 倶楽部はどのような事業を行なっているか」を知る機会が多いことにより、高い評価をしていると考えられる。また、有意な差は見られていないが、「子供以外の家族がクラブ会員」群は、「周りにクラブ会員はいない」群や「友人・知人がクラブ会員」群よりも高い評価を与えていることから、調和 SHC 倶楽部の情報をどれだけ持っているかによって評価が高くなる可能性が示唆されている。

第4節 オープン事業の認知と参加経験

次に、オープン事業と組織ミッション達成度評価について検討を行った。

まず、オープン事業の認知と参加経験を、会員と非会員別に比較した(表 3-6)。調和 SHC 倶楽部が行うオープン事業は、「調和地域運動会」などの公共性の高い事業も含まれているにもかかわらず、会員のオープン事業認知：4.01、参加経験：2.21 に比べ、非会員のオープン事業認知：1.53、参加経験：0.56 と非常に低いことが明らかとなった。

また、それぞれの項目について、会員と非会員との間で平均値の差の検定を行ったところ、認知・参加経験共に 0.1%水準で有意な差が認められた。クラブ会員の方がオープン事業の認知や参加経験が高いことは、当然だと考えられるが、非会員の参加経験の平均値が 0.56 と非常に低くなっており、調和 SHC 倶楽部のオープン事業が非会員との十分な接点となっていないことが示唆される。オープン事業の認知も 1.53 と低く、より積極的なマーケティング活動を行なっていく必要があると考えられるだろう。

表 3-6 オープン事業の認知・参加経験

	会員		非会員		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
オープン事業の認知	4.01	3.31	1.53	1.71	9.25***
オープン事業への参加経験	2.21	2.46	0.56	0.90	8.94***

***P<.001

第1項 オープン事業の認知とクラブの組織ミッション達成度評価

オープン事業の認知とクラブの組織ミッション達成度評価の間に関連があるかどうかを調べるため、オープン事業の認知について、1つ以上のオープン事業を認知している群（会員：N=127，非会員：N=139）と1つも認知していない群（会員：N=15，非会員：N=73）に分け、クラブの組織ミッション達成度評価の平均値の差の検定を行った（表3-7）。会員においては、組織ミッション達成度評価の平均値に差は見られなかったが、非会員においては、0.1%水準で、認知している群のほうがクラブの組織ミッション達成度評価は高かった。

表 3-7 オープン事業の認知の有無とクラブの組織ミッション達成度評価

	会員		非会員		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
オープン事業の認知	4.01	3.31	1.53	1.71	9.25***
オープン事業への参加経験	2.21	2.46	0.56	0.90	8.94***

***P<.001

次に、オープン事業の認知の会員・非会員それぞれの平均値（会員：4.01，非会員：1.53）を境に、認知高群（会員：N=46，非会員：N=74）と認知低群（会員：N=96，非会員：N=138）を作り、それぞれの組織ミッション達成度についても、t 検定で平均値の差の検定を行った（表3-8）。こちらに関しては、会員、非会員共に、オープン事業の認知高群のほうが、認知低群よりも0.1%水準で有意に組織ミッション達成度評価を高く評価していることが明らかになった。

以上の二つの分析により、オープン事業を認知しているかどうか、どの程度認知しているかが、組織ミッション達成度評価へ影響を与えている可能性が示唆された。

表 3-8 オープン事業の認知の高低とクラブの組織ミッション達成度評価

組織ミッション達成度評価	認知高群		認知低群		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
会員	5.97	0.91	5.28	1.18	-3.80***
非会員	4.94	1.37	4.14	1.40	-4.15***

***P<.001

第2項 オープン事業の参加経験とクラブの組織ミッション達成度評価

オープン事業の参加経験についても、同様の分析を行った。

まず、オープン事業の参加経験によって、参加経験あり群（会員：N=101，非会員：N=74）と参加経験なし群（会員：N=41，非会員：N=138）に分け、組織ミッション達成度評価の平均点を、t検定によって比較した（表3-9）。その結果、会員は5%水準、非会員は0.1%水準で差がみられ、どちらも参加経験あり群のほうが組織ミッションの達成度を高く評価していた。

表 3-9 オープン事業参加経験の有無とクラブの組織ミッション達成度評価

組織ミッション達成度評価	参加経験あり		参加経験なし		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
会員	5.67	1.09	5.13	1.19	-2.51*
非会員	5.04	1.33	4.13	1.40	-4.64***

***P<.001 *P<.05

次に、オープン事業の参加経験のそれぞれの平均値（会員：2.21，非会員：0.56）を境にした参加経験高群（会員：N=46，非会員：N=74）と参加経験低群（会員：N=96，非会員：N=138）に分け、クラブの組織ミッション達成度評価について t 検定で比較を行った（表3-10）。その結果、会員において 1%水準、非会員において 0.1%水準で有意な差がみられ、どちらも参加経験高群のほうが、クラブの組織ミッション達成度を高く評価していた。なお、非会員においてはオープン事業参加経験の平均値が 0.56（表3-1 参照）と 1 を下回っているため、認知の有無と同じ結果になっている。

表 3-10 オープン事業参加経験の高低とクラブの組織ミッション達成度評価

組織ミッション達成度評価	参加経験高群		参加経験低群		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
会員	5.94	1.08	5.31	1.11	-3.23**
非会員	5.04	1.33	4.13	1.40	-4.64***

***P<.001 **P<.01

以上の結果により、会員・非会員ともオープン事業の認知と参加経験が、組織ミッション達成度へ影響を与えていることが示唆された。この結果を踏まえ、オープン事業がどのようにクラブの組織ミッション達成度へ影響を与えているかを構造的に把握するため、仮説モデルの検証を行った。

第5節 仮説モデルの検証

本節では、4 節で確認されたオープン事業（認知及び参加経験）とクラブの組織ミッションの達成度評価の関連について、より因果的な関連性を見るための分析を進める。分析を進めるにあたり、サンプルの調整を行った。

サービス品質の研究によると、サービスは認知をしていれば購買前評価というかたちで評価をすることができるとされているが（松岡，2008），認知をしていなければ、サービスを評価することができないとされている。したがって以下の分析では、オープン事業を一つも認知していないサンプルを取り除いた（表 3-11）。

その結果、会員のサンプルは 127、非会員は 139 になった。

表 3-11 オープン事業を1つも認知していないサンプル除外後のサンプル数

	回収数	有効回答数	オープン事業認知
会員	153	142	127
非会員	241	212	139

以上のように、サンプルの調整を行い、会員・非会員共に、仮説モデル（図 2-1）の検証を行った。

オープン事業認知と参加経験については、11 の事業について当てはまるもの全てを選んでもらい、0・1 のダミー変数を用いた合成得点（0～11 点）として把握した。例えば、オープン事業の事業認知に関して、1 つの事業を認知していたら 1 点ということになる。また、クラブの組織ミッションの達成度評価については、これを構成する 6 項目への回答結果に主成分分析を施し、各項目の重み付けを考慮した主成分得点として把握した。

① 会員モデル

まず会員について，AMOS18.0 を用いて仮説モデルの検証を行った（図 3-2）.

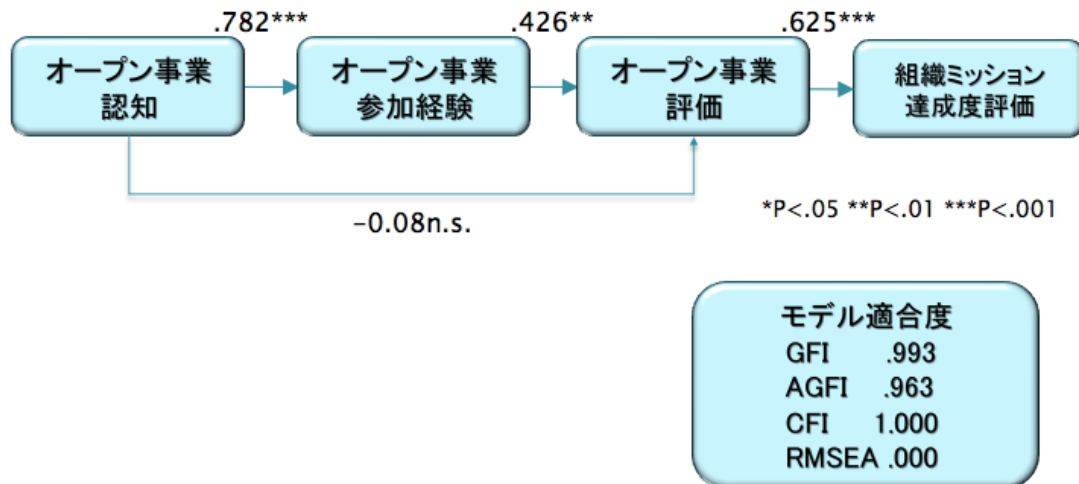


図 3-2 会員モデル結果

会員のモデルでは，モデルの適合度は $GFI=.993$ ， $AGFI=.963$ ， $CFI=1.000$ ， $RMSEA=.000$ であった．この結果は， GFI^7 ， $AGFI^8$ ， CFI^9 ， $RMSEA^{10}$ の各指標は，小塩（2008）の指摘する主な基準値（基準： $GFI \geq .900$ ， $AGFI \geq .900$ ， $CFI \geq .900$ ， $RMSEA \leq .050$ ）を満たしていたため，一定の説明力のあるモデルと捉えることができる．

それぞれの影響については，まず，オープン事業の認知から参加経験，参加経験から評価へそれぞれ 0.1%水準で有意に影響を与えていることが明らかになった．しかし，オープン事業の認知から評価へは有意な影響を与えていない．つまり，どのような活動を行っているか認知しているだけでは，評価には繋がらないと考えられる．

⁷ GFI（Goodness of Fix Index）とは，通常 0 から 1 までの値を取り，モデルの説明力を表す．1 に近いほど説明力があり，.900 以上が当てはまりが良いモデルとされる（小塩，2008）．

⁸ AGFI（Adjusted GFI）とは，GFI を修正した値であり，GFI よりも小さな値となる．.900 以上で当てはまりの良いモデルとされる（小塩，2008）．

⁹ CFI（Comparative Fit Index）とは，分析しているモデルが独立モデルから飽和モデルまでの間のどのあたりに位置するかを表す．1 に近いほど望ましく，.900 より大きいと良いモデルとされる（小塩，2008）．

¹⁰ RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）は小さいほど望ましく，一般的に 0.05 以下であればよく，0.10 以上であれば当てはまりが悪くないとされる（小塩，2008）．

次に、オープン事業の評価からクラブの組織ミッション達成度評価へ、0.1%水準で有意に影響を与えていることがわかった。このことから、会員モデルにおいてオープン事業はクラブの組織ミッション達成度評価を規定することが明らかとなった。

以上のように、オープン事業はクラブの組織ミッション達成度評価の規定因となることが明らかになったが、それぞれに影響を与えているオープン事業評価へ、オープン事業の認知からは影響がみられなかった。このことから、オープン事業はただ認知しているだけではクラブの組織ミッションへはつながらず、オープン事業に参加することで評価を高めて、それぞれを規定しているということがわかる。

② 非会員モデル

次に、AMOS18.0 を用いて非会員の仮説モデルの分析を行った（図 3-3）。

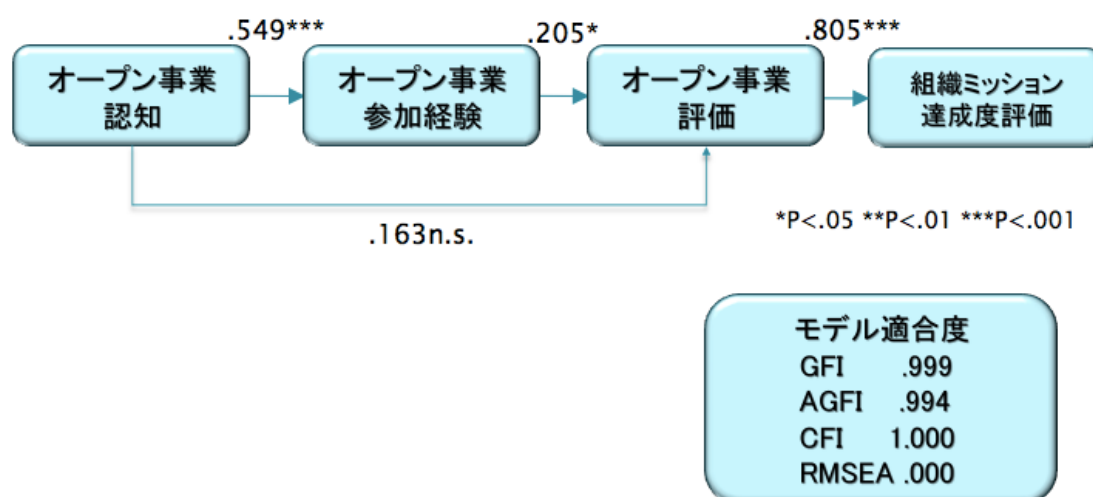


図 3-3 非会員モデル結果

非会員のモデルでは、適合度は GFI=.999, AGFI=.984, CFI=1.000, RMSEA=.000 であり、それぞれ小塩（2008）の指摘する基準値をクリアしており、非会員モデルの適合度は良好と考えられる。

それぞれの項目の関係については、オープン事業の認知から参加経験へ 0.1%水準で影響を与えており、更に参加経験から評価へは 5%水準で有意に影響を与えていることが明らかになった。しかし、会員におけるモデルを分析した結果同様、オープン事業認知から評価へは有意な影響力はみられなかった。

また、オープン事業評価はクラブの組織ミッション達成度に対して 0.1%水準で有意に

影響を与えており、更に影響力の強さを表すパス係数は.805 と、強い影響力を持っていることが明らかになった。

また、会員のモデルと同様、オープン事業の認知から評価へは有意な影響がみられていない。つまり、会員と同様に、非会員においてもオープン事業を認知してもらうだけではなく、実際に参加してもらうことによって評価が高まり、クラブの組織ミッション達成度へ影響があると考えられる。

会員と非会員のモデルを比較すると、オープン事業評価からクラブの組織ミッションの達成度評価への影響力では、会員モデル：.625、非会員モデル：.805 となっており、非会員のほうが強い影響力を持っていることがわかる。これは、非会員が、総合型クラブの行なっている事業に参加する機会は、基本的にオープン事業しかないため、よりクラブ理念達成度評価への影響が強くなっているためと考えられる。

第4章 結論

第1節 まとめ

本研究では、調布市で活動を行う調和 SHC 倶楽部を事例に、会員だけでなく非会員との接点となるオープン事業に着目し、非営利組織である総合型クラブが目指す組織ミッションとクラブのマネジメントへ与える影響について研究を行った。このオープン事業は全国の約 3/4 のクラブが行なっており（中西ら，2011），調和 SHC 倶楽部でも 11 の事業を行なっている。また，本研究では総合型クラブが地域社会へ与える影響のうち，「ミッションは非営利組織が存在する根源というべきもの」（島田，2009，p. 54）という指摘を踏まえ，組織ミッションとして掲げられているものの達成度を経営成果として捉え，評価を行なっている。更に，総合型クラブが地域社会へ与える影響の先行研究（第1章第3節）や，非会員との直接の接点となるというオープン事業の特性，また，「ミッションの達成度評価については主観的になったり，判断が甘くなったりする懸念があったりするが，（中略）それに主観を加える場合も，様々な立場にある人達の評価を集めることなどが必要である」（島田，2009，p. 116）という指摘を踏まえ，会員と非会員の両方の視点から評価を行った。その結果，以下のことが明らかになった。

まず，オープン事業の評価が，会員，非会員共に，クラブの組織ミッション達成度評価へ影響を与えていることが明らかになった。つまり，調和 SHC 調和倶楽部が行なっているオープン事業を評価している人程，調和 SHC 倶楽部が組織ミッションとして掲げている項目を，クラブが実現していると評価している。

また，オープン事業の評価について，オープン事業を認知から評価への影響は，会員，非会員共に見られず，オープン事業評価へは，参加経験からのみ影響があることが明らかになった。つまり，オープン事業に関してどのような活動を行なっているかを知っているだけではオープン事業の評価は高まらず，結果的にクラブの組織ミッション達成度評価は高まることはない。本結果から，組織ミッション達成度評価を高めるためには，実際にオープン事業に参加してもらうことが重要だといえる。

また，オープン事業の評価と参加経験の関係について，会員よりも非会員の方が高い影響を与えていることが明らかになった。このことは，会員と比較して，非会員は調和 SHC

倶楽部との接点が、オープン事業だけのため、よりオープン事業の影響が強くなっていると考えられる。この意味で、オープン事業は総合型クラブと非会員との接点として非常に重要な場になると言えるだろう。

通常、総合型クラブが行うオープン事業は、そのクラブにとって中心的な事業ではない。しかし、本研究の結果より、オープン事業は、クラブが本来目指している組織ミッションを規定している。

つまり、「総合型地域スポーツクラブの展開が、『地域教育力の向上』や『地域の活性化』などの『自治的コミュニティ』に発展したという研究成果は管見ながら見当たらない」（小林, 2003, p. 86）という指摘に対して、「オープン事業を行い、実証的な研究を積み重ねていくことで、反証できる可能性はある」と、本研究より得られた知見からは考えることができるのである。

第2節 実践的示唆

本研究の結論から、以下のような実践的示唆が導かれる。

まず、オープン事業を行い、地域住民がオープン事業へ参加することが、クラブの組織ミッションの達成度評価へ影響を与えることが明らかになった。つまり、オープン事業を充実させることで、クラブが掲げる組織ミッションの評価をより高めることができる。

また、会員、非会員両方とも、オープン事業をただ認知してもらうだけでなく、実際にオープン事業に参加してもらうことが重要である。そのため、会員非会員問わず、気軽に参加することができるオープン事業を行うことが重要であると考えられる。例えば、旧大町小学校の敷地内で開催されているチャリティバザーのような、参加自体は無料のオープン事業は、非会員にとって、金銭的なコストもないため、気軽に参加することが可能だと考えられる。このようなオープン事業を行い、クラブの会員や非会員が、交流する機会を提供することで、非営利組織体として目指すべき組織ミッション達成度評価が高まる可能性は大いに期待できる。

もちろん、経営体としてまず優先させることは、会員に対してサービスを行い、経営を安定させることだが、非営利組織として組織ミッションを追求していくためには、このようなオープン事業を充実させていくことでより地域社会へ貢献し、クラブ自体の正当性を確保していくことができると言えよう。

第3節 研究の限界と今後の課題

本研究では以下の研究の限界を有する。

まず一点目は、総合型クラブの行なっているオープン事業に関して、活動内容を全く考慮しないかたちで研究を行なっている点である。本研究では、オープン事業の実際に認知している、または参加したことのある事業について全て答えて貰う形式をとっているが、どの程度それぞれの事業を認知しているのか、どのようなオープン事業に参加し、どのような経験をしたのかといった、オープン事業の質的な側面は検証することができていない。

二点目は、本研究はあくまで調和 SHC 倶楽部のケーススタディであり、本研究の結果から広く総合型クラブ一般に適用するということは困難であるという点である。この点に関しては、今度のスポーツ経営学またはスポーツ社会学などの分野から、研究が蓄積されていくことが重要だと考える。

三点目は、調査法上の限界により、非会員調査を調和 SHC 倶楽部が活動対象として考えている地域すべてに対して調査が行えなかった点である。

最後に、我が国の地域スポーツ研究においては、地域のスポーツクラブを非営利組織として明示的に捉え、その活動理念からクラブの評価を行なっている研究は、殆ど無いのが現状である。また、最近では、総合型クラブの全国展開によって、経営体として様々な事業を行なっているクラブがあるが、それら事業の影響についても検証がなされた研究は少ない。したがって、今後地域スポーツ研究の分野では、様々な総合型クラブの行なっている事業に関して、非営利組織という視点から研究が蓄積されていくことが望まれる。

参考文献

- 赤岡広周（2009）中央競技団体の戦略と組織． 経済学研究， 59(2)：49－56
- 調和 SHC 倶楽部（2011）Trim
- 兵藤和花子（2007）非営利組織体における情報開示と業績評価の可能性． 年報経営分析研究， 23：87－94
- 伊藤恵造・松村和則（2009）団地空間における公園管理活動の展開とその変容-垂水区団地スポーツ協会の事例- 体育学研究， 54：107-121
- 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤編（1998）心理学マニュアル 質問紙法． 北大路書房
- 神谷国広・中道實（1997）都市的共同性の社会学． ナカニシヤ出版：東京
- 加藤久明（2007）アウトカムに視座を置いた非営利組織活動研究－活動参加者の「学習」と「価値創造」に主眼を置いた概念枠組みに関する一考察－． 千葉商大論業， 45(1)：45－68
- 岸翔子（2011）地域への愛着に影響を及ぼす要因に関する研究－地域のスポーツ環境に着目して－． 2010 年度早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文
- 小林勉（2003）日本のスポーツ振興施策の動向と課題－コミュニティ・スポーツ論の系譜に寄せて－． 信州大学教育学部紀要， 110：81－88
- 黒後洋・藤田直（2007）栃木県における総合型地域スポーツクラブの現状と課題について（2）． 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要， 30：389－398
- 黒須充（2002）地域スポーツの未来を考える，ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ． NPO 法人クラブネット監修，黒須充・水上博司編著，大修館書店，東京，1－9
- 松永敬子（2005）総合型地域スポーツクラブの認知と公共性を高めるための経営課題～会員と非会員の比較検討から導き出したクラブ発展の鍵～． 大阪体育大学紀要， 36：111－120
- 松岡宏高（2008）概念装置としてのスポーツ消費者． 原田宗彦（編著）藤本淳也・松岡宏高（著），スポーツマーケティング． 大修館書店：東京，67－89
- 宮城好郎・佐藤清和（1999）非営利組織体の運営成果の測定方法． 岩手県立大学社会福祉学部紀要， 2(1)：11－30
- 文部科学省（2000）スポーツ振興基本計画，東京

- 文部科学省（2010）平成 22 年度総合型地域スポーツクラブ育成状況
- 文部科学省（2011）スポーツ基本法，東京
- 中西純司・行實鉄平・村田真一（2011）「新しい公共」を担う総合型地域スポーツクラブの課題と展望．福岡教育大学紀要，第 60 号，第 5 分冊：77－91
- 永田純也・藤本純也・松岡宏高（2007）オリックス・バファローズのスタジアム観戦者の特性に関する研究－元大阪近鉄バファローズファンと元オリックス・ブルーウェーブファンに注目して－．大阪体育大学紀要，38：44－51
- 中村陽人（2007）サービス品質の測定尺度に関する実証研究－SERVQUAL の再検討－．横浜国際社会科学研究所，11(6)：39－52
- 中村陽人（2008）サービス品質の次元－テキストマイニングによる自由記述アンケートの定性分析－．横浜国際社会科学研究所，13(1・2)：43－56
- 日本体育協会（2008）総合型地域スポーツクラブ創設ガイド，東京
- 岡本大輔（1992）非営利組織の“企業評価”－農協協同組合の経営力調査より－．三田商学研究，35(5)：79－95
- 大西孝之・原田宗彦（2008）プロスポーツチームが行う地域貢献活動の消費者に与える影響：大学生のチーム・アイデンティフィケーションと観戦意図の変化に着目して．スポーツ科学研究，5：253－268
- 小塩真司（2008）はじめての共分散構造分析 AMOS によるパス解析．東京図書：東京
- 柴田敏晴・丸山富雄・永田秀隆（2004）総合型地域スポーツクラブの形成過程と評価に関する研究－秋田県琴丘町を事例として－．仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集，5：9－16
- 島田恒（2009）非営利組織のマネジメント 使命・成果・責任．東洋経済新報社，東京
- 清水紀宏（2002）よい体育・スポーツ経営の条件，体育・スポーツ経営学講義，八代勉・中村平編著，大修館書店，東京，127－137
- 園部雅彦（1984）コミュニティの現実と可能性．鈴木広・倉沢進編，都市社会学．アカデミア出版会：京都，316－342
- 鈴木栄太郎（1969）都市社会学原理（鈴木栄太郎著作集Ⅳ）．未来社：東京
- 高屋稔申・同西英子（2008）地域スポーツ活動によるコミュニティ形成に関する研究．日本建築学会研究報告九州支部，3，計画系，47：657－660
- 豊田秀樹（2007）共分散構造分析 [AMOS 編]，東京図書，東京

- 堤理仁・赤松宏和・中川義英（2002）地域スポーツの地域活性化効果に関する研究－総合型クラブを対象として－． 日本都市計画学会学術研究論文集， 37：283－288
- 梅垣明美・永谷稔（2005）総合型地域スポーツクラブのあり方に関する研究－公共圏の創出をめざして－． 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要， 43：31－41
- 山本孔一・堺賢治・塩原正長（2010）総合型地域スポーツクラブ設立のための住民調査(2)－吉井スポレククラブの場合－． 環太平洋大学研究紀要， 4：133－144
- 吉田毅(1996)地域スポーツクラブの質的課題再考－福岡市のスポーツクラブ調査から－． 健康科学， 18：65－75
- 行實鉄平（2003） 総合型地域スポーツクラブのマネジメントに関する事例研究－NPO 法人化過程に着目して－． 体育・スポーツ経営学研究， 18(1)：25－36

資料

アンケート調査ご協力をお願い

早稲田大学スポーツ経営学研究室修士二年の米山と申します。

本調査は、地域社会においてスポーツクラブの役割を明らかにするために、皆様にご意見をお伺いさせていただくものです。

また、本調査では完全無記名になっているため、皆様にご迷惑をおかけすることは一切ございませんので、皆様の率直なご意見をお聞かせくださいますよう、お願いします。

お忙しいところ、大変恐縮ではございますが、趣旨をご理解の上、調査にご協力いただけますよう、何卒よろしくお願い致します。

このアンケートは、調和 SHC 倶楽部の会員ではない方がご記入の上、同封しております
返信用封筒にて、11 月 30 日（水）までにご返信いただけますよう、お願いします。

【調査概要】

地域スポーツクラブが地域社会で果たす役割についての研究

【調査対象】

調布市にお住まいの、調和 SHC 倶楽部の会員でない方

（本調査は、15 歳以上の方がご回答ください）

【郵送期限】

2011 年 11 月 30 日（水）

（同封しております返信用封筒にてご返信ください。切手は不要です）

本アンケートに関するご不明な点等ございましたら、下記までご連絡ください。

早稲田大学スポーツ経営学研究室

〒202-8790

東京都西東京市東伏見 3-4-1 早稲田大学 79 号館 717 号室

米山 拓志

Tel : 080-1122-7194

Mail : hiro_yone@toki.waseda.jp

アンケート調査ご協力のお願い

このアンケートは、修士論文の調査のために行うものです。ご回答いただいた内容はすべて数字に置き換え統計的に処理されますので、皆様個人の回答が公表されたり、ご迷惑をおかけすることは一切ございません。お忙しい中、大変恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願いします。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 米山 拓志
早稲田大学スポーツ科学学術院 木村 和彦

Q1 調和SHC倶楽部の会員歴をお答えください。
(年 ヶ月)

Q2 調和SHC倶楽部の行っている活動で、
会員以外も参加できる活動(地域貢献活動)のうち知っているものの番号に○をしてください。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 調和地域運動会 | 2. 東日本大震災チャリティバザー |
| 3. 新春スポーツ交流大会 | 4. SHC倶楽部寄席 |
| 5. ニュースポーツフェスタ | 6. 散策会 |
| 7. インドアベタンク大会 | 8. 睡眠についての講演会 |
| 9. 調和文化祭 | 10. 調布市福祉祭りへの参加 |
| 11. ゴスペルクリスマスコンサート | |

Q3 調和SHC倶楽部の行っている活動で、会員以外も参加できる活動(地域貢献活動)のうち
これまで参加したことのあるものの番号に○をしてください。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 調和地域運動会 | 2. 東日本大震災チャリティバザー |
| 3. 新春スポーツ交流大会 | 4. SHC倶楽部寄席 |
| 5. ニュースポーツフェスタ | 6. 散策会 |
| 7. インドアベタンク大会 | 8. 睡眠についての講演会 |
| 9. 調和文化祭 | 10. 調布市福祉祭りへの参加 |
| 11. ゴスペルクリスマスコンサート | |

Q4 調和SHC倶楽部の行っている会員以外も参加できる活動に対する評価についてお聞きます。

まったくそう思わない				どちらともいえない				とてもそう思う				
調和SHC倶楽部の地域貢献活動は地域へ貢献している												
	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---

裏面に続きます→

Q5 調和SHC倶楽部について質問します。
調和SHC倶楽部設立の効果について、お答えください。

	まったくそう思わない				どちらともいえない				とてもそう思う				
地域住民のスポーツ振興に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域住民の文化活動の振興に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域住民の健康・体力の維持・向上に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
豊かな人間形成に寄与している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域の連帯を培うことに貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
明るい市民生活の実現に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7

Q6 あなたの調和SHC倶楽部に対する思いについてお答えください。

	まったく当てはまらない				どちらともいえない				とても当てはまる				
私は、調和SHC倶楽部のファンである	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
私は、調和SHC倶楽部の会員であることを他人に知らせたい	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
私は、調和SHC倶楽部の状況に関わらず、クラブを応援する	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7

Q7 今後、あなたが調和SHC倶楽部で行ってみたい種目全てに○をしてください。

ソフトボール	社交ダンス・ダンススポーツ	体操	弓道
バレーボール	ゴルフ(コース)	柔道	陸上競技
野球	ゲートボール	軟式野球	ウォーキング
ラグビー	その他()		

Q8 あなた自身のことについてお答えください。

性別	1. 男性 2. 女性	年齢	満 () 歳
配偶者	1. 独身 2. 既婚	子供	1. いる 2. いない
ご職業	1. 正社員 2. 契約社員 3. パート・アルバイト 4. 主夫・主婦 5. 学生 6. 無職 7. その他()		
居住地の郵便番号	□□□-□□□□	居住年数	()年 ()ヶ月

Q9 調和SHC倶楽部へご意見等ございましたら、ご自由にお書きください。

これで以上となります。
ご協力ありがとうございました。

アンケート調査ご協力をお願い

このアンケートは、修士論文の調査のために行うものです。ご回答いただいた内容はすべて数字に置き換え統計的に処理されますので、皆様個人の回答が公表されたり、ご迷惑をおかけすることは一切ございません。お忙しい中、大変恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願いします。
また、こちらのアンケートは必ず調和SHC倶楽部の会員ではない方がお答え下さい。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科 米山 拡志
早稲田大学スポーツ科学学術院 木村 和彦

Q1 あなたの調和SHC倶楽部との関係についてお答えください。

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. 子供がクラブ会員 | 2. 子供以外の家族がクラブ会員 |
| 3. 友人・知人がクラブ会員 | 4. 周りにクラブ会員はいない |

Q2 調和SHC倶楽部の行っている活動で、
会員以外も参加できる活動(地域貢献活動)のうち知っているものの番号に○をしてください。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 調和地域運動会 | 2. 東日本大震災チャリティバザー |
| 3. 新春スポーツ交流大会 | 4. SHC倶楽部寄席 |
| 5. ニューススポーツフェスタ | 6. 散策会 |
| 7. インドアベタンク大会 | 8. 睡眠についての講演会 |
| 9. 調和文化祭 | 10. 調布市福祉祭りへの参加 |
| 11. ゴスペルクリスマスコンサート | |

Q3 調和SHC倶楽部の行っている活動で、会員以外も参加できる活動(地域貢献活動)のうち
これまで参加したことのあるものの番号に○をしてください。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1. 調和地域運動会 | 2. 東日本大震災チャリティバザー |
| 3. 新春スポーツ交流大会 | 4. SHC倶楽部寄席 |
| 5. ニューススポーツフェスタ | 6. 散策会 |
| 7. インドアベタンク大会 | 8. 睡眠についての講演会 |
| 9. 調和文化祭 | 10. 調布市福祉祭りへの参加 |
| 11. ゴスペルクリスマスコンサート | |

Q4 調和SHC倶楽部の行っている会員以外も参加できる活動に対する評価についてお聞きます。

まったくそう思わない				どちらともいえない				とてもそう思う					
調和SHC倶楽部の地域貢献活動は地域へ貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7

裏面に続きます→

Q5 調和SHC倶楽部について質問します。

調和SHC倶楽部の地域社会への効果について、お答えください。

	まったくそう思わない				どちらともいえない				とてもそう思う				
地域住民のスポーツ振興に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域住民の文化活動の振興に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域住民の健康・体力の維持・向上に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
豊かな人間形成に寄与している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
地域の連帯を培うことに貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7
明るい市民生活の実現に貢献している	1	---	2	---	3	---	4	---	5	---	6	---	7

Q6 あなたは今後、調和SHC倶楽部の活動に参加したいですか？

全く参加したくない	あまり参加したくない	機会があったら参加したい	とても参加したい			
1	---	2	---	3	---	4

Q7 今後、あなたが行ってみたい運動種目全てに○をしてください。

ソフトボール バレーボール 野球 ラグビー	社交ダンス・ダンススポーツ ゴルフ(コース) ゲートボール その他()	体操 柔道 軟式野球	弓道 陸上競技 ウォーキング
--------------------------------	---	------------------	----------------------

Q8 あなた自身のことについてお答えください。

性別	1. 男性 2. 女性	年齢	満 () 歳
配偶者	1. 独身 2. 既婚	子供	1. いる 2. いない
ご職業	1. 正社員 2. 契約社員 3. パート・アルバイト 4. 主夫・主婦 5. 学生 6. 無職 7. その他()		
調布市の居住年数	()年 ()ヶ月		

Q9 調和SHC倶楽部へご意見等ございましたら、ご自由にお書きください。

これで以上となります。
ご協力ありがとうございました。

謝辞

この早稲田大学での大学院生活の2年間は、本当にあっという間に終わりました。この2年間は僕にとって本当に充実していて、常に刺激があった日々であり、貴重な時間でした。

この間には、本当に多くの方々にお世話になりました。

木村和彦先生には、本当にお世話になりました。先生には、たくさんのご迷惑をおかけしたにもかかわらず、常に僕に対して「熱と技」を持って指導してくださいました。この2年間、木村研究室に入って本当によかったと常に感じておりました。心より感謝を申し上げます。

また、副査を引き受けてくださいました作野誠一先生には、2年間作野ゼミとサブゼミに参加させていただき、本当にお世話になりました。同じく副査を引き受けてくださいました松岡宏高先生は、僕が突然相談に行っても、常に適切なご指導をしてくださいました。2人の先生方にも深く感謝申し上げます。

木村ゼミでは、石井十郎さん、早乙女誉さん、安藤太郎さん、醍醐笑部さん、岸翔子さん、霜島広樹さん、関本ゆうさん、中島和輝さんの諸先輩方には公私とも、本当にお世話になりました。同期である田珊さん、また、後輩である望月拓実君、甲賀輝君、田中惟君もゼミでの議論を活性化してくれました。本当に木村ゼミのみんながいてくれたおかげで、充実した時間を過ごすことができました。

武藤研究室の柴田勇樹さん、作野研究室の野本創君は、もはや木村ゼミの一員として過ごすことができました。いろいろな意味で、お互い刺激し合うことができたと感じております。

また、原田研究室、間野研究室、松岡研究室の同期の皆さん。いつ僕が体育棟へ行っても、大体誰かが勉強をしていました。個人的に飲みにいたり、フットサルをしたり、ボルダリングをしたりと、本当にたくさんの思い出があります。みんながいたからこそ、修士論文を書き上げ、充実した大学院生活を送ることができました。本当にありがとう。

そして調査にご協力をいただきました調和 SHC 倶楽部の皆様、木村ゼミ 0B の方々、木村ゼミ学部生のみんな、その他僕を支えてくださいました全ての方々にお礼を申し上げます。

最後に、僕が大学院に進学したいと言ったとき、「できるサポートはする」と言ってくれた、両親、弟達に心より感謝を申し上げます。

2月23日 米山 拓志